



Decoder 2017 by Mallory Catlett : Video Design by Keith Skretch and Lighting Design by Yuki Nakase

LED Advances

「今後10年以内に舞台照明の器材がすべて白熱電球からLEDに変わるよ」と話していたのは、すでに3年前のことです。その頃すでに、テレビ業界では新設のニュース・スタジオはすべての照明器材をLEDにし、低照度、低放熱、低運営費を実現していましたが、劇場では「そんなこと許されない!」と目くらまを立てる舞台照明家や舞台装置家がたくさんいました。彼らの意見は「LEDはどうも冷たい」「灼熱の太陽や消えゆく蠟燭の明かりをLEDは表現できない」ということでしたが、あれから3年経ち、照明家を取り巻く状況は急速に変わりつつあります。

ここにきてよく耳にするのは、「LED照明器材がこんなにも良いとは気づかなかった」という舞台照明家の意見です。実際、光だけを見て白熱電球なのかLEDなのか、判断不可能な器材が増えてきました。そこで先日、LED照明器材のみを使用して演劇の照明デザインをしてみることにしました。もちろん、私の興味本位だけで全LED化を決断したのではなく、現場の使用可能電気容量が作品に求められる照明効果に比べて非常にわずかだったことが第1の理由として挙げられます。これまでも特殊効果や装置、水平線あてにLEDを用いることは幾度もありましたが、人物あてを含むすべての明かりをLEDにすることは初めてで、白熱電球よりもやや低い演色性数値がどれほど目目に影響するか、テクニカル・リハーサルに入るまで心配でした。結果は、とても静かで安定した暖かいLEDの明かりが出演者の表情を引き出すのを体

験することとなりました。

これまで使用したLED器材の中で私がその美しさに最も驚かされ、また、信頼して舞台で人物あてに使用したいと思わせるのはETC Source Four LED Lustrです。事実上“ホット・スポット”の存在しないエリプソイダルLEDスポットライトが作るフロント・サイドライト・システムは均一でむらがありません。また、人種や肌のバラエティに富むニューヨークの舞台出演者陣に光を当てるとき、場面ごとに舞台上の役者に応じてほんの少しの色調節が可能なLustrは照明家にとって大きな助けとなります。さらに、Lustrのフェードアウトはまさに「消えゆく蠟燭の明かり」を表現できます。舞台上で出力レベルがゼロまで滑らかに落ちていくLEDの光を実現できたのは、私にとってLustrが初めてでした。

そのほかにも、ETC SeladorやChroma-Q Color Forceが再現できる色の幅広さには毎度魅了され、MartinのQuantum Washの明るさと静かさは期待に沿います。現在も、舞台照明の現場では多くの白熱電球照明器材が主として使用され、ワイヤレス制御・バッテリー搭載のLED照明器材が重宝されるイベント照明の現場でも全照明器材の半数強が白熱電球照明器材です。しかし、あと数年でその割合が逆転し、白熱電球よりもLEDが手に入りやすくなる未来が近い気がすると同時に、LED照明器材のみで照明デザインする楽しさと自信を感じています。LED照明を取り巻くさらなる技術向上を期待しています。